

こまちの 農業記



雄勝支店 小野地区
藤原 諭さん(47歳)

複合経営による

周年栽培

4月の寒い天候から一転、5月に入り今日は暖かい日になりました。本格的に始まる農作業を迎えて、水稲栽培、複合経営により周年で農業に取り組む藤原諭さんを訪ねました。

藤原諭さん：

「家を継ぎ就農するもの」と学生時代から自然と思っていた諭さんは、大学卒業後、米国アイダホで農業研修を2年間行いました。帰国後は、研修仲間から誘われ、園芸作物を中心とした岩手県の農業法人で様々な園芸作物の生産に携わります。平成元年、妻の也寸子さんとの結婚を機に実家に戻り就農しました。

就農後は、JAこまち青年部初代委員長や地元直売所の代表等を務めたこともあり、自らの目指す営農スタイルの確立と農業を中心とした地域活性化に努める農業人です。

周年栽培の確立を目指し

稲作農家だった藤原家に戻り、これまでの経験を活かして、トマト・きゅうりの栽培を始め、園芸作物は諭さん、水稲は父親で分担する営農スタイルを目指します。「自身の農業経営を行いたい」との強い思いを持ち無我夢中で頑張りました。冬場の農作業が無いときは、勤めに出ることもありました。そんな中で、「労働力の分散、作業効率、計画的な栽培・収穫出荷の確立が、周年営農、継続営農につながる」と考えるよう

になりました。一緒に農業に働んできた父親が平成14年に他界し、安定した専業農家を目指す諭さんにとってその思いは、ますます強くなりました。

現在の農業経営

春から秋の農繁期は水稲・トマトを中心に、冬場はトマト栽培で使ったハウスを活かし、チンゲン菜・ホウレン草、春にかけてのパンジーなどといった花壇用苗と幅広く栽培しています。出荷先も、JAを中心としながら、直売所への周年出荷を念頭に栽培計画を立て、所得の安定に努めます。「周年営農をする上で、多様な出荷体制で、所得の安定確保を図ることも大切です」と、消費者の情報を収集できる直売所の販売にも期待を寄せています。

「我が家の農業は、トマトも含め栽培農産物は、オーソドックスな作りで、特別なものはないよ」と話しつつも、土づくりには、気を遣い、連作障害の軽減に努めるとともに、日々、作物への「目配り」を大切にしているそうです。

次世代につなげる農業を

「これからも無理なく、安定した農業を続けたい」と話す諭さんは、自身も含めた地域の農業を、今後如何に次の担い手に引き継ぎ、住み良い地域環境を作り上げるかを考えています。多種多様な地域住民が仲良く、今出来ることを、少しずつ、将来を見据えて行動していきたいと思っています。

今日の表紙

山わさび

花咲き乱れ、心和む

組合員の方に、「山わさびの花って見たことあるが?」と誘われ、咲いている場所を案内して頂きました。鮮やかな白い花が山一面に咲き乱れ、初めて見る光景は、桜の花に勝るとも劣らない、心和む瞬間でした。「花」って本当にいいですね。



撮影日 平成22年5月8日
撮影場所 高瀬地区